

ドイツの村で劇を見た

栩木伸明

昨夏、用事がいくつか重なったので、ヨーロッパへ行った。ミュンヘンの古い友人、ヤスヒロとアキコ夫妻の家に宿借りしていたある日、街角の骨董屋で聖ベネディクトゥスの木像を見つけた。



「18世紀にオーバーアマガウでつくられた聖人像ですね。カップに入れた蛇で薬をつくっているのです」と語る店主の話は少々怪しかった。

その像が左手で持っていたのは、じつは、聖人が毒殺されかけたときに割れたワイン杯。蛇は毒の象徴である。聖人像の顔は、フィレンツェの修道院で見たフラ・アンジェリコのフレスコ画の、らっきょう形の禿頭（とくとう）に豊かなあごひげをたくわえたベネディクトゥスによく似ていた。

□ □ □

オーバーアマガウという地名を調べてみたら、木彫が盛んな古い村だとわかった。ミュンヘンの南、車で2時間ほどのところである。よく晴れた翌朝、ふたりに話したら、「よし決まり」というアキコのひと声で、ヤスヒロが車を出してくれることになった。

昼過ぎに村に着くと、通りは閑散としていて、木彫店は軒並み閉まっている。せっかく来たのに残念だったが、収穫もあった。この村では〈キリスト受難劇〉が10年に一度上演されることになっていて、今年がその年だという。2020年の開催予定がコロナ禍のせいで2年延期され、すぐその劇場で今日も上演しているらしい。人気が無いのは、村人総出で上演しているからなのだ。

数日後の夕方、帰宅したら、「チケットとれたよ」とアキコが言った。直観と行動力に秀でた旧友に感謝！

この村の〈キリスト受難劇〉の起源は、1633年にさかのぼる。伝説によれば、出稼ぎ先から妻子に会うために帰郷したカスパー・シスラーという男がはからずも村にペストを持ち込み、大勢が犠牲になった。村人達（たち）は同年10月、キリストの人生と死と復活を劇にして10年に一度上演します、と神に誓った。その日以来、村ではペストの死者が出なくなり、村人の誓いは約400年ものあいだ、守られ続けてきたのだという。

9月1日、山あいの村を再訪した。午後1時半に開幕した公演は3時間の食事休憩をはさんで、午後9時に終演した。

手作りの素朴な芝居かと思っていたら全然違った。キリストの生涯をたどる劇の主要場面に、それらの場面と響き合う旧約聖書のエピソードが活人画として対置される。活人画というのは、舞台装置を組んだ空間に役者達が静止画のようにポーズをとって見せる手法で、オーケストラと合唱団が物語を添える。

セリフ劇と音楽劇を交互に見せるその舞台は、オペラかスペクタクル映画のようだった。白い布をつかってキリストを十字架から下ろすシーンでは、アントワープ大聖堂で見たルーベンスの「キリスト降架」の絵が動き出したかと思った。圧倒的な演劇の力だった。

人口5000人の村で、2000人以上が参加していると言え、公演の規模を想像してもらえるだろうか。半野外劇場の観客席は5000席。春から夏の5カ月間に100回以上上演され、世界中から50万人の観客がおしよせたという。



今年の公演のハイライトを収録した音楽CDつきの記念本を買った。その本によれば、活人画を含む長大な脚本を書いたのは18世紀、この村に近いエッタールのベネディクト会修道院にいた修士フェルディナント・ロスナー。らっきょうに似た風貌の聖ベネディクトゥス像が生まれた場所と時代に、今日まで続く受難劇の骨子をこしらえたベネディクト会士が活躍していたのだ。なんと素敵（すてき）な偶然だろう。

記念本の序文は、舞台監督のクリスチャン・シュテュツカル氏書いている。代々上演に参加してきた家系に生まれ、1990年以来、4回目の監督をつとめる彼は、かつてはキリスト教徒しか参加できなかった公演をその他の村人にも開放し、従来の脚本に見られた反ユダヤ主義的傾向を是正してきたことなどを淡々と語っている。

そして、「コロナ禍の今、新たな誓いは立てないのか？」と尋ねたがる人に対しては「大笑い」で答えるしかないと言い、現代の病気や戦争や飢饉（ききん）は神が与えた「罰」ではなく、すべて人間に起因するのだと断言する。

オーバーアマガウの村人達はどうか、キリストの生涯をたどる演劇を、世界の現状を見直し、再解釈する契機にしてきたようだ。伝統という名を冠した力強い批評精神にぼくは脱帽した。

とちぎ・のぶあき 1958年東京生まれ。アイルランド文学者、早稲田大教授。近著に「ダブリンからダブリンへ」。訳書も多数。

（2023年2月4日付け、日本経済新聞「文化欄」）